

米 竹 遺 跡

第5次調査

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 1

大分市教育委員会

序 文

本書を大分市埋蔵文化財調査報告書第 110 集として、ここに刊行いたします。

米竹遺跡の所在する鶴崎台地は、縄文時代中期の小池原貝塚、弥生から古墳時代には尾崎遺跡や北の崎遺跡、古代には地蔵原遺跡、また中世には千歳城が築かれました。このように、米竹遺跡周辺は大分市内でも多くの遺跡が集中する地域であります。その中でも米竹遺跡は、弥生時代中期～後期の集落遺跡として知られており、今回の調査でも食物を保存するための貯蔵穴が多く見つかりました。また短期間での施設の重複が多く見られることから、頻繁に造り替えが行われていたと考えられます。このことは今後、集落の構造や遺跡の実態を解明する上での重要な資料となりました。

本報告書が、埋蔵文化財の活用とともに、考古学や郷土史学の発展にとって有意義なものになれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査や整理作業、報告書作成にあたって、ご理解とご協力をいただきました関係者各位の皆様方に対し、ここに深く感謝の意を表します。

平成 23 年 3 月 31 日

大分市教育委員会

教育長 足立一馬

例 言

1. 本書は平成 22 年度、大分市大字千歳字花畑 1770-1 において(有)マルハチエンタープライズ（代表取締役村 上義元）の委託を受け実施した宅地造成に伴う米竹遺跡第 5 次の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、(有)マルハチエンタープライズ（代表取締役村上義元）の全面的な協力のもと、大分市教育委員 会が主体となって実施した。
3. 発掘調査期間は、平成 22 年 9 月 27 日～平成 22 年 10 月 8 日の期間で実施し、資料整理及び報告書の作成は、 調査終了後から平成 23 年 3 月まで行われた。
4. 発掘調査に伴う機械及び人力による掘削及び埋戻作業は、大分市の委託を受け九州総合文化財研究所（業務 責任者 服部真知）が行った。
5. 発掘調査における遺構の実測・写真撮影は松浦憲治、奥村義貴、上原翔平が行い、遺構図面の製図は奥村が 行った。
6. 出土遺物の整理作業は、稗田智美、小野千恵美、松木晴美、倉増美智代、木村藍子、佐藤良子が行った。
7. 本書に掲載した遺物の実測・製図・写真撮影等整理作業は、大分市の委託を受け雅企画(有)（業務責任者 瀧 野玲子）が行った。
8. 本書の執筆分担は、第 1～4 章（松浦）、第 5 章（高畠豊）である。本書の編集は佐藤が行った。

凡 例

1. 遺構の規模はm、遺物の法量はcmをそれぞれ用いている。
2. 座標については、世界測地系の平面直角座標 2 系の X・Y 座標を基準として調査を行った。図中に記載され る方位は座標北（G.N）を指している。
3. 本書で用いた遺構略号は、SK：貯蔵穴、土坑、SX：性格不明遺構を表している。
4. 出土遺物、図面、写真等は、大分市教育委員会が収蔵・保管している。

目 次

第 1 章はじめに	1
第 1 節 調査経過	
第 2 節 調査組織	
第 2 章遺跡の立地と環境	1
第 1 節 地理的環境	
第 2 節 歴史的環境	
第 3 章調査の成果	4
第 1 節 調査の方法	
第 2 節 遺構	
第 3 節 遺物	
第 4 章 まとめ	15
第 1 節 第 5 次調査の成果	
第 2 節 結語	
第 5 章 立会調査	17

表 目 次

第 1 表 米竹遺跡第 5 次調査区出土遺物観察表	16
---------------------------	----

挿図目次

第 1 図 遺跡位置図	2
第 2 図 周辺主要遺跡分布図(1/50,000)	2
第 3 図 米竹遺跡第 5 次調査区位置図(1/3,000)	3
第 4 図 米竹遺跡第 5 次遺構配置図(1/100)	4
第 5 図 米竹遺跡第 5 次全体遺構図(1/100)	5
第 6 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図①(1/40)	6
第 7 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図②(1/40)	8
第 8 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図③(1/40)	9
第 9 図 米竹遺跡第 5 次北壁土層断面図(1/40)	9
第 10 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図④(1/40)	10
第 11 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図①(1/4)	12
第 12 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図②(1/4)	14
第 13 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図③(1/4)	14
第 14 図 立会状況写真及び SK1001 土層断面写真・ 図面(1/50)	17
第 15 図 立会調査出土遺物実測図(1/4)	17
第 16 図 立会時平面図及び東壁土層図(1/100)	18

写真図版目次

写真図版 1

調査区全景（北より） SK005 完掘状況（南より） SK050 完掘状況（西より） SK020 半截土層断面（東より）
SK070 土層断面（南より） SK045 完掘状況（北より） SK060 完掘状況（南より） SK065 完掘状況（南より）

写真図版 2

SK028 完掘状況（東より） SK011 完掘状況（西より） SK055 完掘状況（西より） SK040 完掘状況（南より）
SK019 完掘状況（西より） SK015 完掘状況（南より） SK012 完掘状況（東より） SK021 完掘状況（西より）

写真図版 3

第 11 図 SK005-003・002 第 11 図 SK070-002・001 第 11 図 SK070-003 第 11 図 SK045-001・003
第 11 図 SK045-002 第 11 図 SK045-004 第 11 図 SK010-001 第 11 図 SK010-002・003・004
第 11 図 SK065-001 第 12 図 SK015-003 第 12 図 SK015-004・005 第 12 図 SK012-002
第 12 図 SK012-004 第 13 図 SK054-001 第 13 図 SK054-002

第1章 はじめに

第1節 調査経過

調査対象である米竹遺跡は、大野川の支流乙津川の西側一帯に広がる標高 40 m 前後の鶴崎台地に位置する。当該台地は、大分市中部を代表する弥生時代遺跡の集中する箇所として周知されており米竹遺跡も、これまでの調査において、弥生時代中期を中心とした遺跡の存在が確認されている。

調査対象地である、大分市大字千歳字花畑 1770-1 については、これまでに数回にわたり開発が計画された場所であり、既に文化財有無の確認調査が実施され、遺構の存在及び検出深度・分布について、確認されている状況であった。

今回、当該地において新たに宅地造成が計画され、事業主である(有)マルハチエンタープライズ代表取締役村上義元氏による、文化財有無の照会がなされた。既に行なわれている確認調査の内容を伝えた上、切土により遺跡が破壊される区域については、記録保存を目的とした調査を行い、掘削深度が遺構検出面に近くなる擁壁部分については、工事立会いを行うこととする調査方針が協議された。

この協議を受け、事業主による文化財保護法第 93 条の 2 の届出を経て、大分県教育委員会教育長による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知により、発掘調査実施の方針が示され発掘調査の実施に至った。

発掘調査は、(有)マルハチエンタープライズ代表取締役村上義元氏との間で平成 22 年 8 月 20 日付けで締結された協定書・契約書に基づいて実施され、発掘調査は平成 22 年 9 月 27 日～10 月 8 日にかけて行い、資料整理及び報告書の作成は調査終了後より平成 23 年 3 月 31 日まで行われた。

第2節 調査組織

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	足立 一馬
事務局	大分市教育委員会	教育部	文化財課
	次長兼課長	玉永 光洋	
	課長補佐	福田 誠一	
		塔鼻 光司	
	係長	坪根 伸也	
	専門員	池邊千太郎 高島 豊	
	主査	神崎小由美	
調査員	大分市教育委員会	教育部	文化財課
	専門員	高島 豊	事務員 松浦 憲治
	嘱託	奥村 義貴 羽田野裕之 上原 翔平 佐藤 良子	
		稗田 智美 小野千恵美 松木 晴美 倉増美智代 木村 藍子	

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

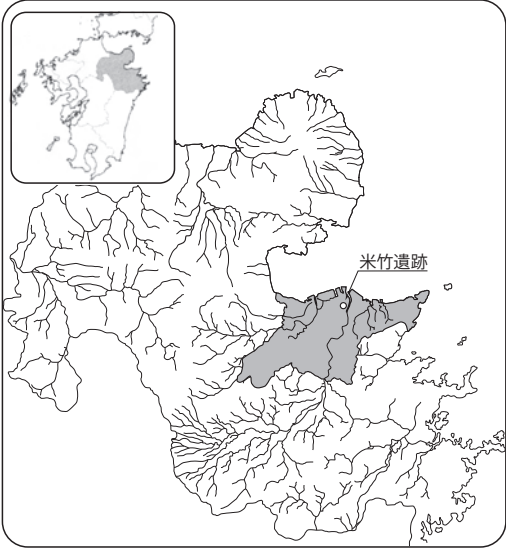
大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端に位置し、大分県下を南北に流れ別府湾に注ぐ大分川、乙津川・大野川により、その下流部において大分平野や鶴崎台地などを形成している。

今回報告する米竹遺跡は西を大分川、東を乙津川・大野川に挟まれた南北にのびる鶴崎台地と呼ばれる台地上にあり、台地北端からは北に別府湾を望む。遺跡は台地の北東端に位置し、台地中央を南北にはしる開析谷の東側、乙津川へと下る傾斜面との間の平坦面に立地している。

第2節 歴史的環境

米竹遺跡の所在する鶴崎台地上には、多くの遺跡が存在する。旧石器時代では地蔵原遺跡において扁平大型礫、

二次加工品である剥片石器などが出土している。また多武尾遺跡では黒曜石製ナイフ形石器や流紋岩製の搔器や剥片、石核などが出土している。縄文時代では横尾貝塚が挙げられる。横尾貝塚では貝塚や住居域、水場遺構が確認されているほか、縄文時代早期から後期にかけての大量の土器が出土し、さらにかご入りの姫島産黒曜石など当時の流通をうかがい知ることのできる遺物が出土している。弥生時代において前期は数少ないが、中後期には尾崎遺跡や北の崎遺跡などがあり、住居跡や貯蔵穴が展開することが確認されている。また多武尾遺跡では周溝を巡らす環濠集落が展開しており、その周溝からは青銅製小銅鐸が出土している。ほかにも鶴崎台地南側の水分神社周辺において神社伝世銅矛が出土するなど大分平野の中でも青銅器が多く出土する地域である。古墳時代は鶴崎台地西側の大分川寄りで横穴墓が多数展開し、南側には有田古墳が存在する。集落としては地蔵原遺跡が挙げられるが、弥生時代ほどの展開は見られない。集落が低地に移ったものと考えられる。古代では地蔵原遺跡で官衛的な施設が展開し、特異な瓦当を呈する軒丸瓦などが出土している。他にも井ノ久保遺跡では土師器焼成土坑が検出されている。中世においては千歳城が築かれ、地蔵原遺跡では集落が確認されており、長期間にわたって遺跡の立地する台地である。

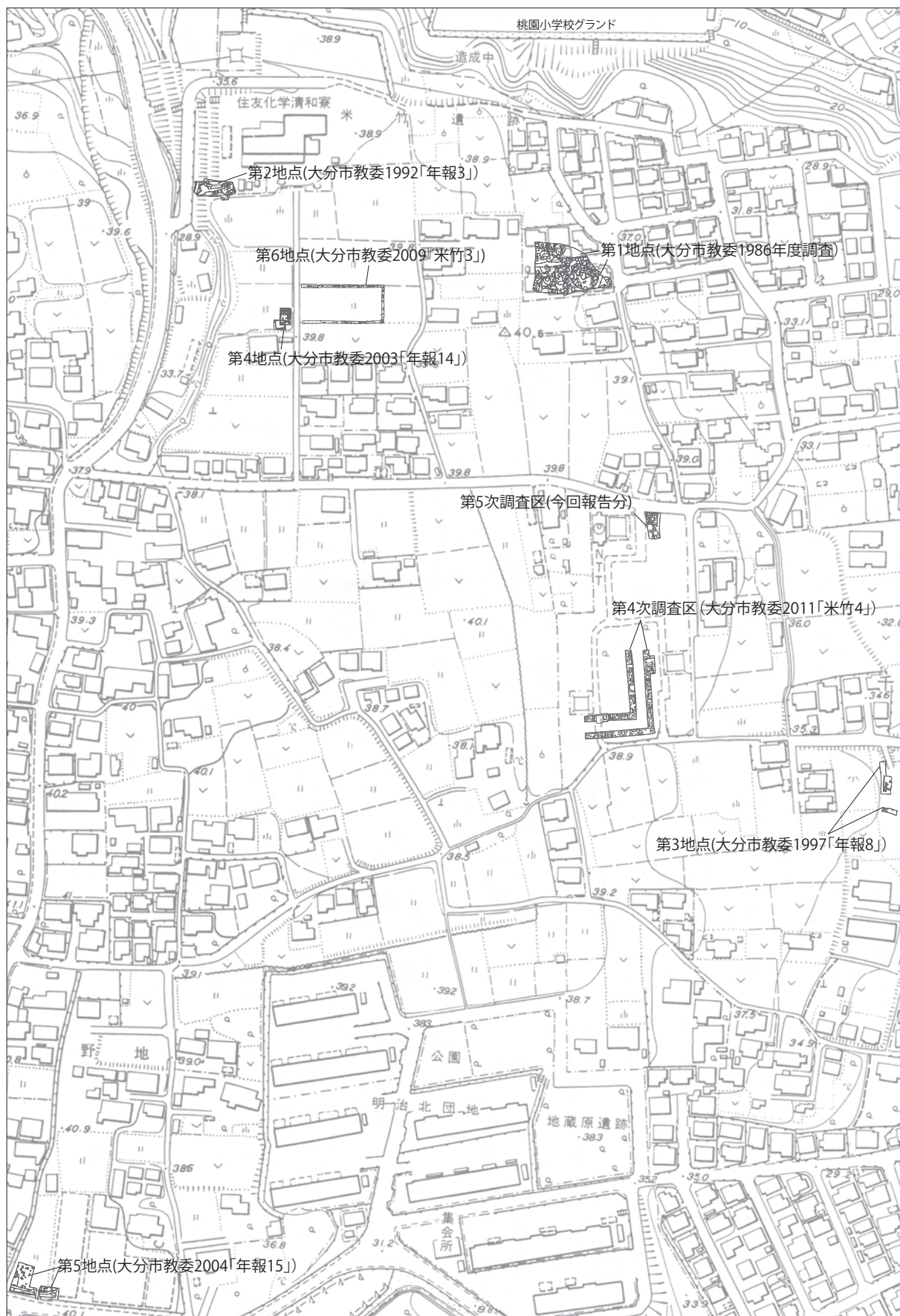


第1図 遺跡位置図



	遺 跡 名
1	米竹遺跡
2	地蔵原遺跡
3	千歳城跡
4	尾崎遺跡
5	小池原貝塚
6	高城観音院備蓄銭出土地
7	高松東遺跡
8	高松陣屋跡
9	北の崎遺跡
10	猪野遺跡
11	猪野中原遺跡
12	猪野新土井遺跡
13	米良草遺跡
14	葛木遺跡
15	二目川遺跡
16	水分神社銅矛出土地
17	横尾遺跡
18	有田古墳
19	横尾貝塚
20	岡原遺跡
21	一方平Ⅰ遺跡
22	一方平Ⅱ遺跡
23	一方平Ⅲ遺跡
24	一方平Ⅳ遺跡
25	丸池遺跡
26	鶴崎町遺跡群
27	鶴崎御茶屋跡(鶴崎城跡)

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

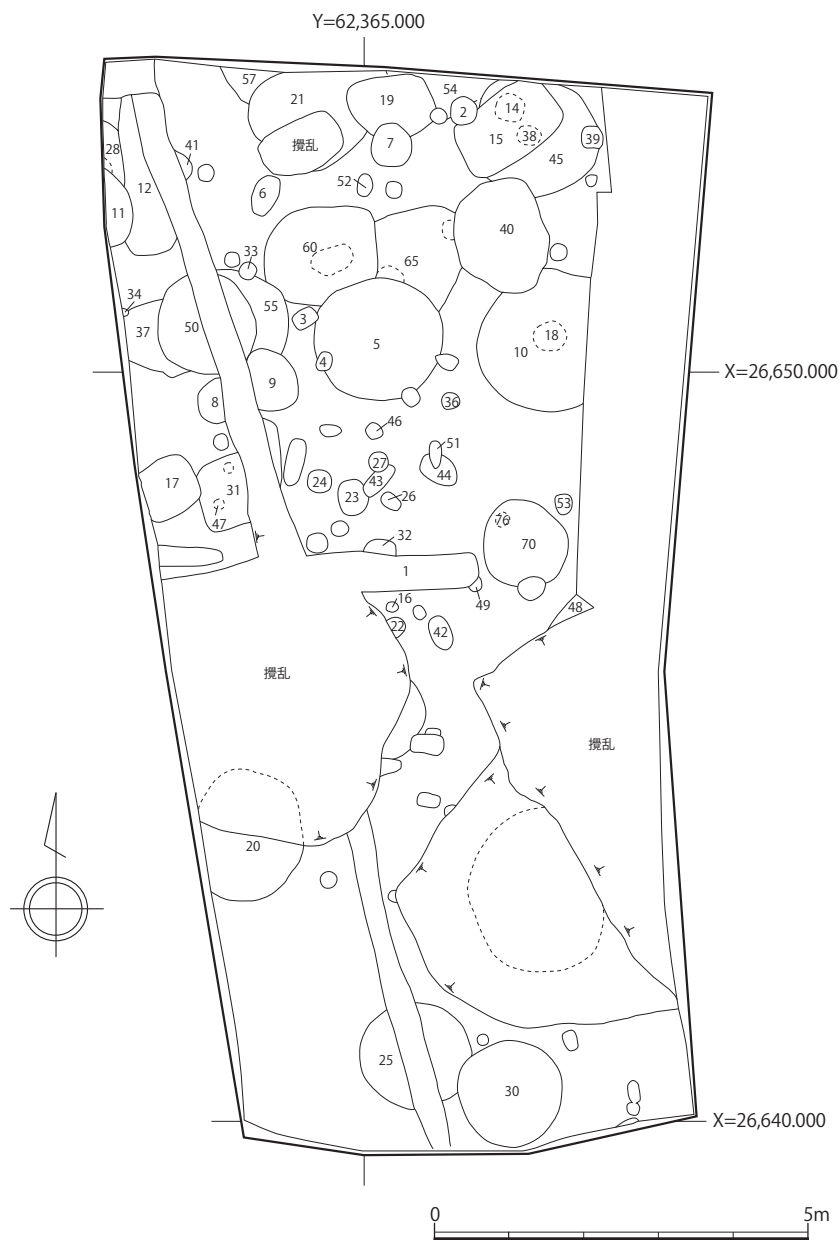


第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

第1章第1節で述べたように、今回の調査は、切土により遺跡が破壊される区域については、記録保存を目的とした調査を行い、掘削深度が遺構検出面に近くなる擁壁部分については、工事立会いを行うこととする調査方針により実施していることから、調査対象地は、宅地造成区内道路が既存道路に接続する北端部のみとなった。尚、切土の傾斜の関係で、切土が浅く遺構検出面に達しない調査対象地南半部については、遺構検出のみの調査とし、現状保存を行っている。工事立会いとした東側擁壁部分については、遺構配置図の作成及び壁面土層図に記録を行い、良好な形で検出された貯蔵穴の一部について掘り下げを行った。

基本層序は、現地表面から約0.5 mまでに現代の造成土を確認でき、その下位に黄褐色粘質土層（ソフトローム層）が存在する。遺構検出面は、黄褐色粘質土層上面である。



第4図 米竹遺跡第5次遺構配置図 (1/100)

第 2 節 遺構

1. 概要

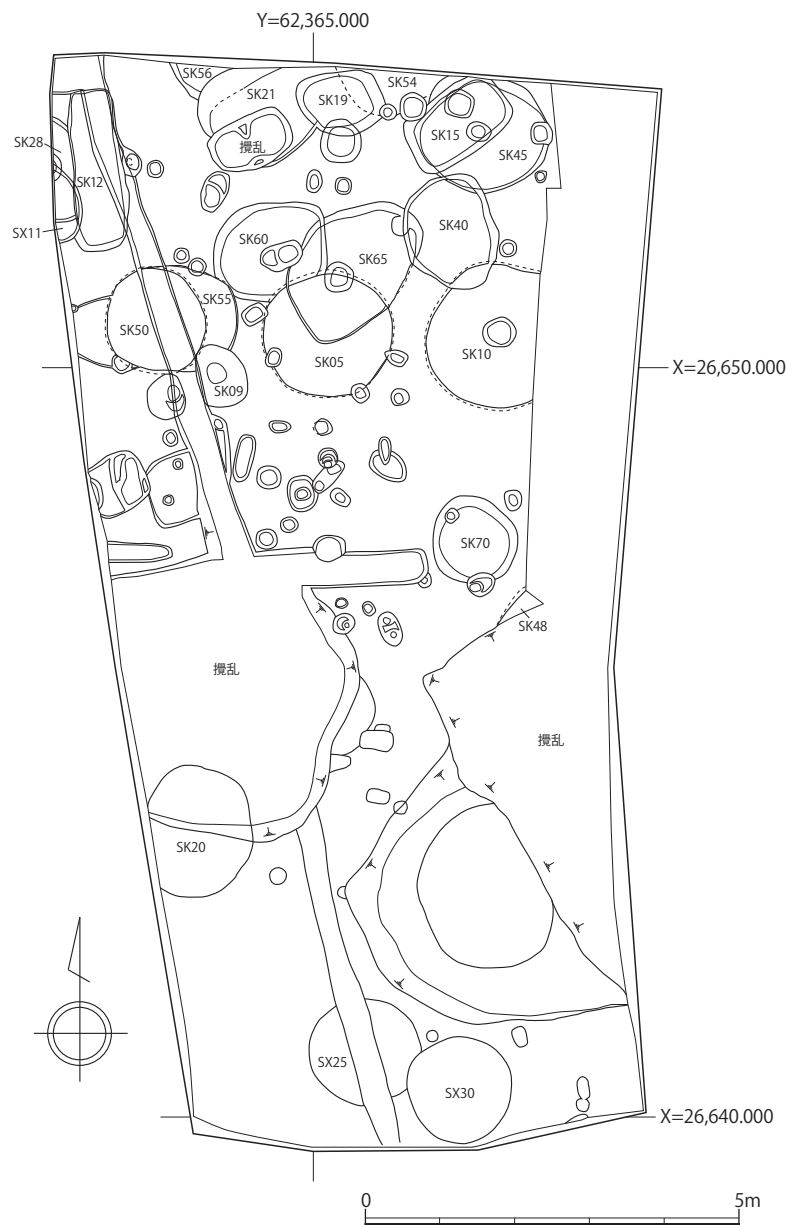
検出した遺構は主に貯蔵穴と土坑であり、竪穴建物跡などそれ以外の遺構は確認できなかった。なお調査区南端で検出した SX025・030 に関しては前節で述べた状況により、未掘のまま現状保存を行い、調査を終了している。

遺構密度は高く、特に北側に密集した状況が認められる。出土遺物から遺構の時期は大部分が弥生時代中期と判断される。また、現代造成土及び現代攪乱土から古墳時代の古式土師器片や、中世遺物片がごく少量出土している。

2. 貯蔵穴・土坑 (SK)

SK005 (第 6 図)

調査区中央北寄りで検出した遺構で、SK060・065 を切る。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.70 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は壁面が下方に広がるフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の中央には浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。出土遺物には弥生土器壺・甕 (第 11

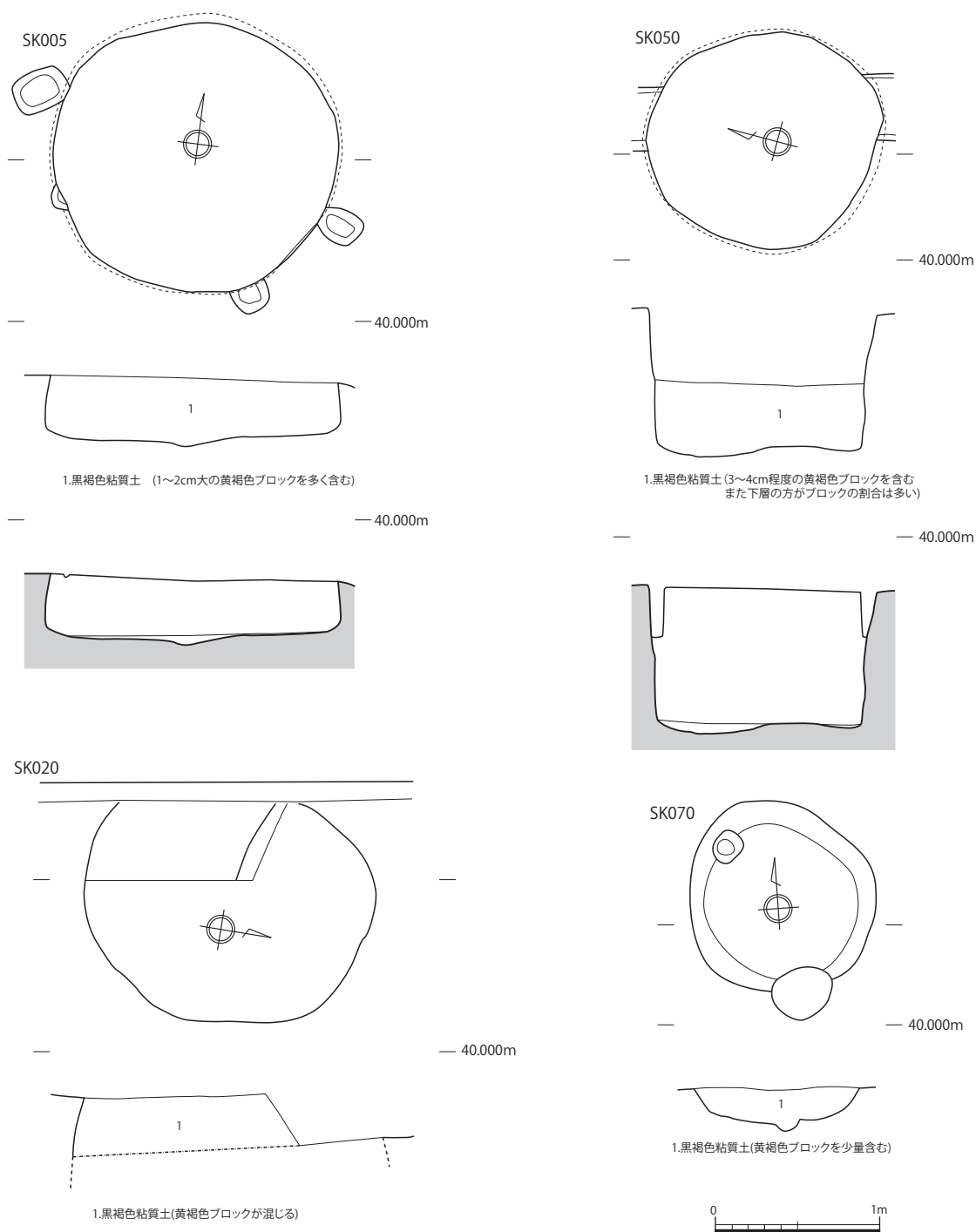


第 5 図 米竹遺跡第 5 次全体遺構図 (1/100)

図 SK005-001 ～ 004) がある。

SK050 (第 6 図)

調査区東側北寄りで検出した遺構で、SK055 を切る。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.84 m、深さ約 0.90 m を測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形を呈している。底面は平坦ではなく、若干の起伏が認められる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しがおこなわれたと判断される。埋土中からは弥生土器甕 (第 11 図 SK050-001 ～ 003) が出土している。



第 6 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図① (1/40)

SK020（第 6 図）

調査区東側南寄りで検出した遺構で、前節で述べた理由により未完掘で調査を終了している。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.78 m、深さ 0.3 m 以上を測る。断面形状が袋状もしくはフラスコ状を呈すると思われ、平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを含む。出土遺物には弥生土器片があるがいずれも、小片のため図化していない。

SK070（第 6 図）

調査区西側北寄りで検出した。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.15 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は皿形を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。貯蔵穴の可能性も想定される遺構である。埋土中からは弥生土器壺・甕（第 11 図 SK070-001 ～ 003）が出土している。

SK010（第 7 図）

調査区東端北寄りで検出した遺構で、SK040 に切られる。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.90 m、深さ約 0.50 m を測る。断面形状は壁面が外側に膨らむ袋状を呈し、底面は平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は弥生土器壺・甕（第 11 図 SK010-001 ～ 005）が出土している。

SK045（第 7 図）

調査区北端で検出した遺構で、SK015 に切られる。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 1.58 m、深さ約 0.50 m を測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形を呈し、底面は平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。出土遺物には弥生土器壺・甕・台付鉢（第 11 図 SK045-001 ～ 004）がある。

SK060（第 7 図）

調査区中央北寄りで検出した土坑で、SK005・055 に切られる。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長径約 1.68 m、短径約 1.30 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は皿形を呈し、埋土は暗灰褐色粘質土である。貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物には弥生土器壺・甕（第 11 図 SK060-001 ～ 002）がある。

SK065（第 7 図）

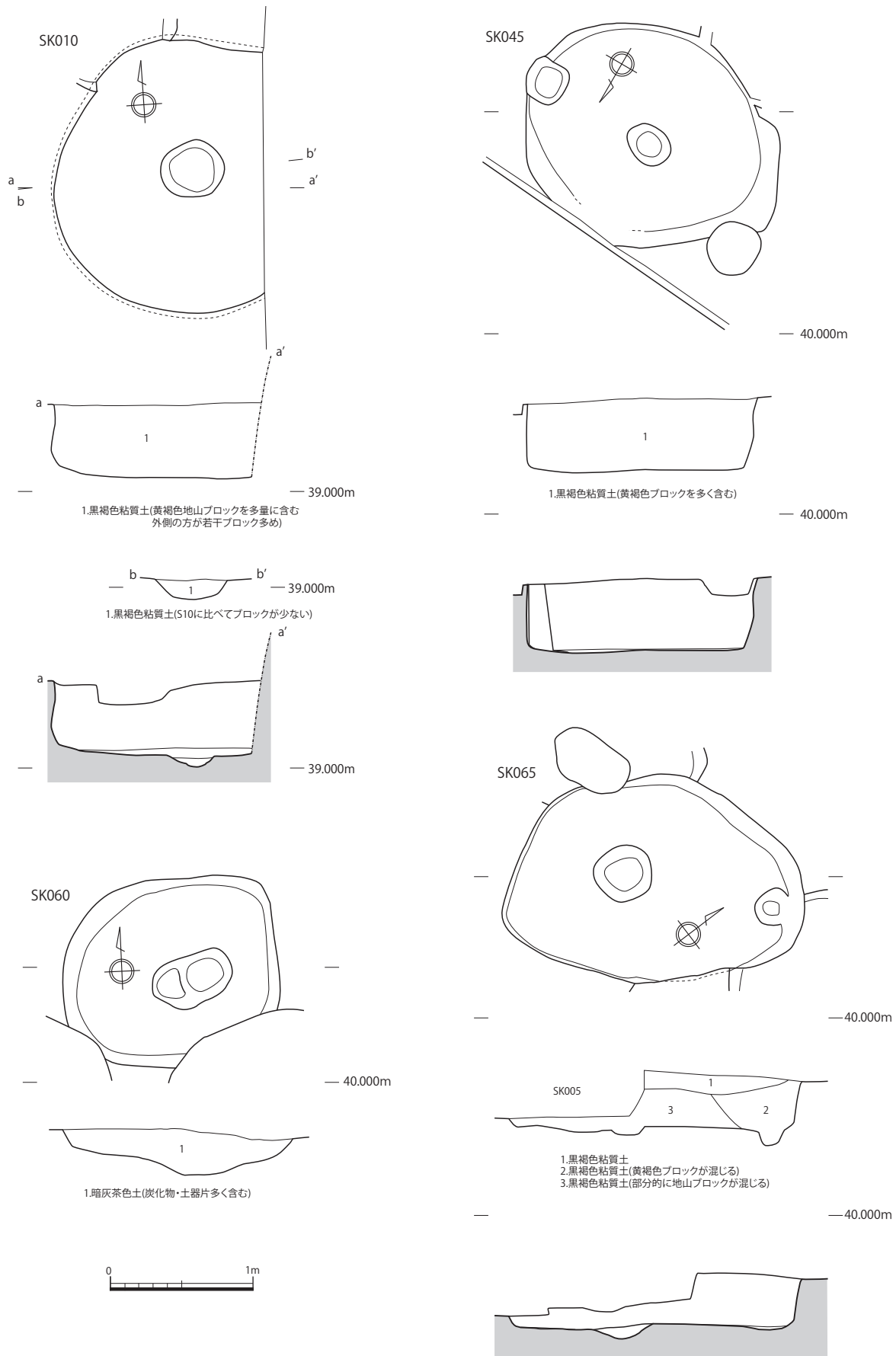
調査区中央北寄りで検出した土坑で、SK005・060 に切られる。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長軸約 2.02 m、短軸約 1.44 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は方形を呈すると思われ、中央に浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。1・2 層は別遺構の可能性もあるが、明確な平面プランを確認できず、埋土も類似することから同一の遺構としている。出土遺物には弥生土器甕（第 11 図 SK045-001 ～ 002）がある。

SK028（第 8 図）

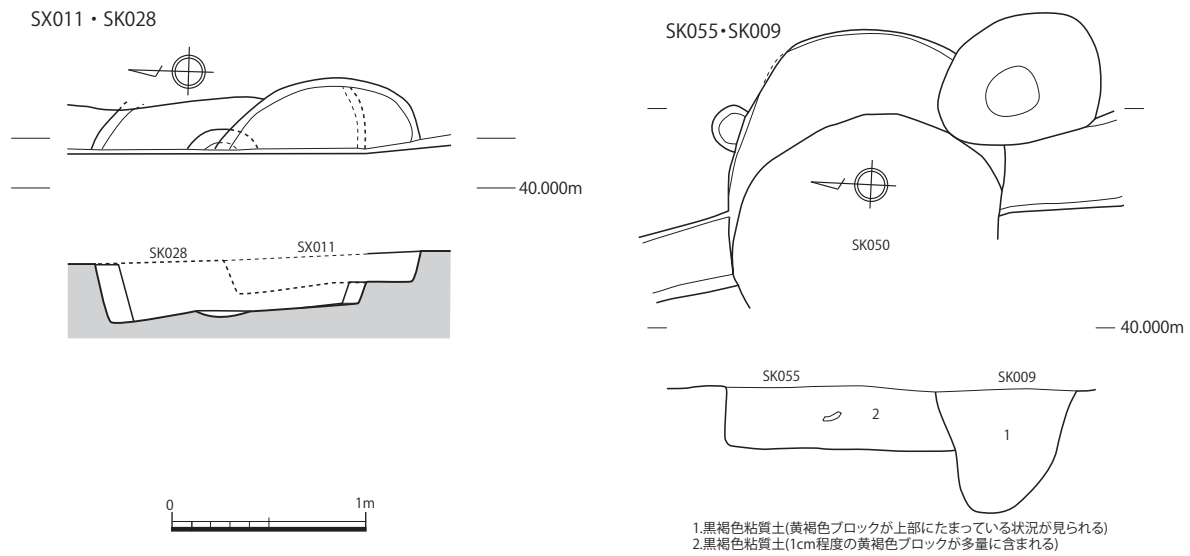
調査区西端北寄りで検出した遺構で、SK011・012 に切られる。平面形状は円形を呈すると思われ、規模は直径約 1.44 m、深さ 0.32 m を測る。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の中央にはごく浅い窪みを確認できる。平面形状及び底面の状況から貯蔵穴の可能性が高い。埋土中からは弥生土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

SK055（第 8 図）

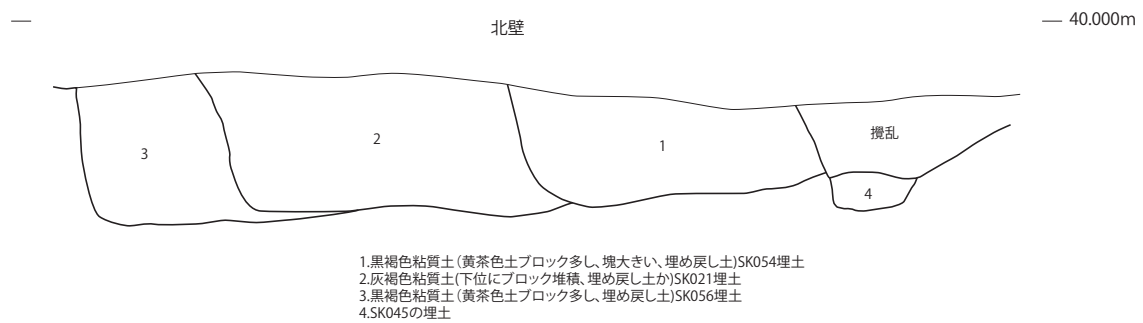
調査区西側北寄りで検出した遺構で、SK050・009 に切られる。平面形状は円形を呈し、規模は直径約 1.42 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は方形を呈し、底面は平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。出土遺物には弥生土器片があるが、小片のため図化していない。



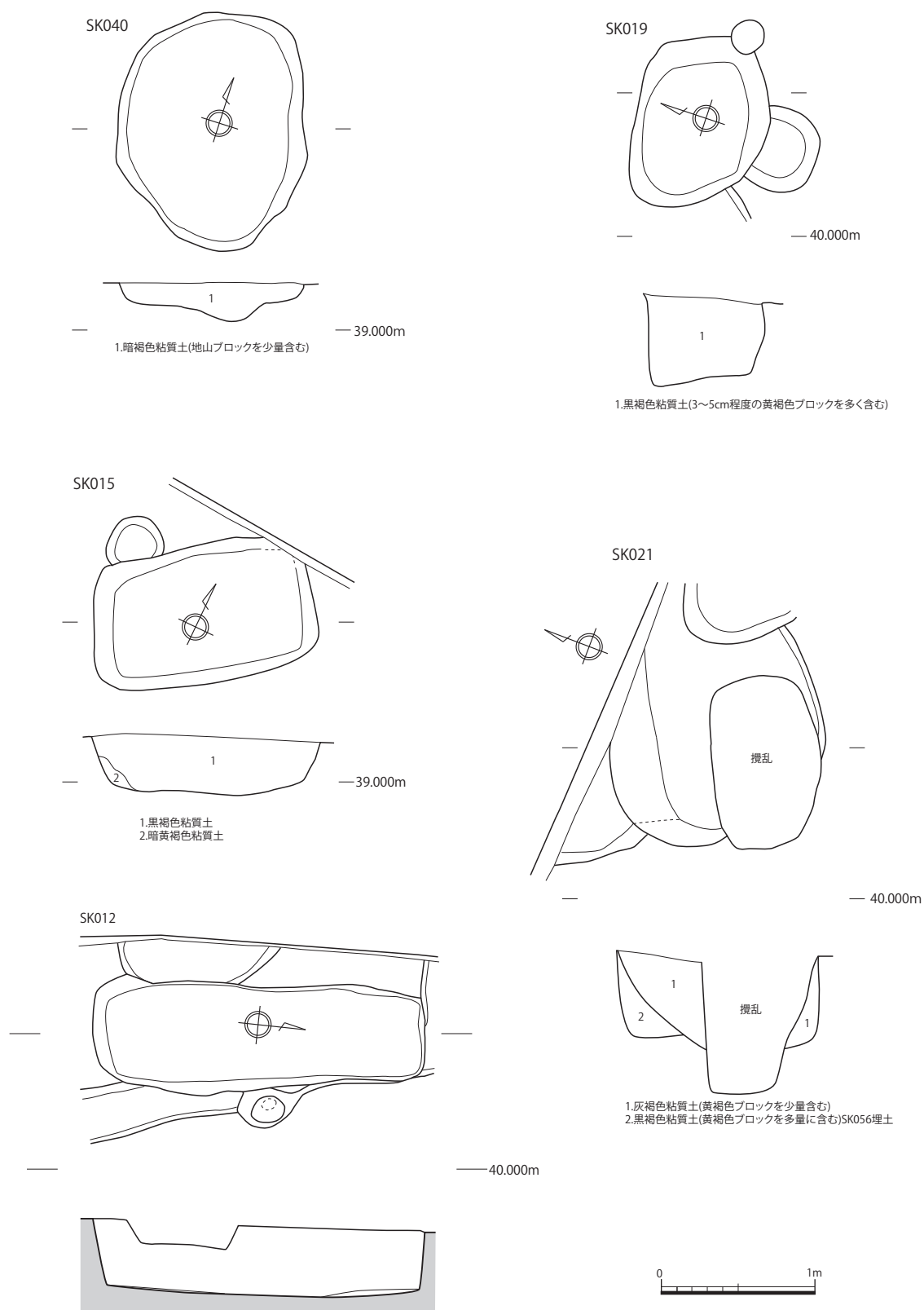
第 7 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図② (1/40)



第 8 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図③ (1/40)



第 9 図 米竹遺跡第 5 次調査区北壁土層実測図 (1/40)



第 10 図 米竹遺跡第 5 次個別遺構実測図④ (1/40)

SK009（第 8 図）

調査区西側北寄りで検出した遺構で、SK055 を切る。平面形状は不整円形を呈し、規模は直径約 0.8 m、深さ約 0.65 m を測る。埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物には弥生土器高坏脚部（第 11 図 SK009-001）がある。

SK040（第 10 図）

調査区東側北寄りで検出した土坑で、SK010・045・065 を切る。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長径約 1.55 m、短径約 1.22 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は皿形を呈し、底面はレンズ状を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。埋土中から弥生土器甕（第 12 図 SK040-001）が出土している。

SK015（第 10 図）

調査区北端で検出した土坑で、SK045 を切る。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸約 1.43 m、短軸約 0.90 m、深さ約 0.36 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。底面はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器壺・甕（第 12 図 SK015-001 ～ 005）が出土している。

SK019（第 10 図）

調査区北端で検出した土坑で、SK021・054 を切る。平面形状は不整長方形を呈し、規模は長軸約 1.07 m、短軸約 0.88 m、深さ約 0.55 m を測る。底面は北側に向かってやや深くなる。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中から弥生土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

SK021（第 10 図）

調査区北端で検出した土坑で、SK019・054 に切られる。一部が調査区外にのびる。平面形状は不整楕円形を呈すると考えられ、規模は長径約 1.70 m 以上、短径約 1.42 m、深さ約 0.58 m を測る。南側壁に比べて北側壁がかなり緩やかに立ちあがる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器甕（第 12 図 SK021-001 ～ 002）が出土している。

SK012（第 10 図）

調査区北西隅で検出した土坑で、SK011 に切られ、028 を切る。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸約 2.17 m、短軸約 0.71 m、深さ約 0.44 m を測る。断面形状は方形に近い。底面はレンズ状を呈する。貯蔵穴の可能性が想定される。出土遺物には弥生土器甕及び打製石器（第 12 図 SK012-001 ～ 004）がある。

SK054（第 9 図）

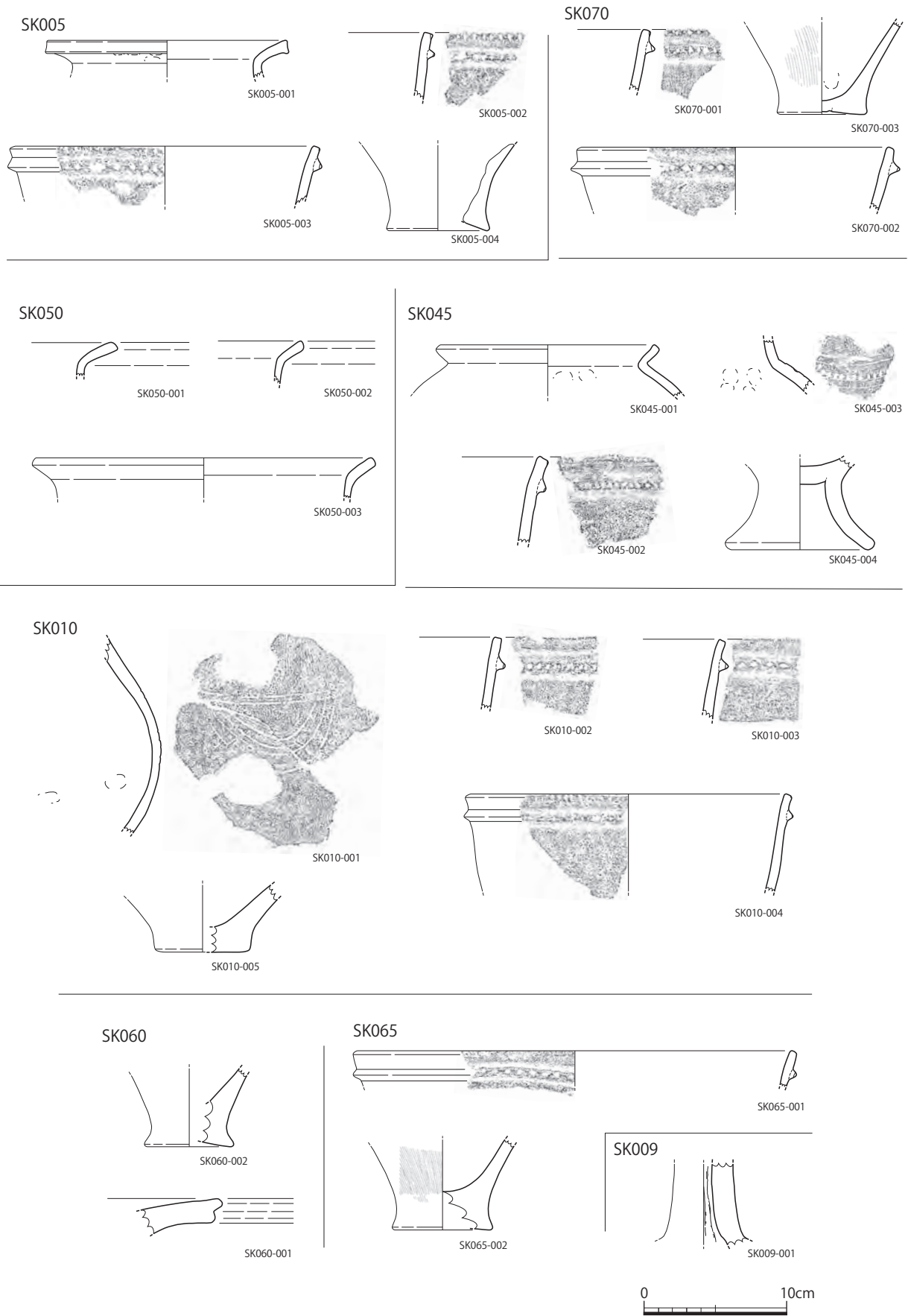
調査区北端で検出した遺構で、SK019 に切られる。平面形状は切り合い関係及び調査区外のため不明である。規模は深さ約 0.54 m を測る。断面形状は方形を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックをかなり多く含んでおり、人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。平面形状は不明ではあるが、断面形状及び埋土の状況から貯蔵穴である可能性が高いと考えられる。出土遺物には弥生土器甕（第 13 図 SK054-001・002）がある。

SK056（第 9 図）

調査区北端で検出した遺構で、SK021 に切られる。平面形状はほとんどが調査区外のため不明である。規模は深さ約 0.72 m を測る。断面形状は方形を呈すると思われ、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含む。平面形状は不明であるが、断面形状及び埋土の状況から貯蔵穴である可能性が高いと考えられる。出土遺物は弥生土器片があるが、小片のため図化していない。

SK048

調査区東側中央で検出した遺構で、東側の大きな攪乱に切られている。わずかな部分だけしか残存していないため平面形状及び規模が不明である。深さは約 0.65 m を測る。残存している壁面が下方に広がっており、フラスコ状を呈すると考えられることから、貯蔵穴の可能性が高い。残存部分があまりに少ないことから、ここでは遺構図を載せていない。遺物は弥生土器甕（第 13 図 SK048-001・002）が出土している。



第 11 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図① (1/4)

第 3 節 遺物

第 11 図 SK005-001 ～ 004 は SK005 出土の弥生土器甕である。1 は東北部九州系の口縁部で、口縁端部を上方につまみ上げるタイプである。胎土に角閃石、長石を含む。2・3 は下城式甕の口縁部である。2 は口縁部がやや外側に開く。口縁端部に刻目を施し、口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。3 は口縁部がやや外側に開く。口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。2 は胎土に長石、石英を、3 は角閃石、長石を含む。4 は底部で、胎土に長石を含む。

第 11 図 SK050-001 ～ 003 は SK050 出土の弥生土器で、甕の口縁部である。東北部九州系であり、1 は胎土に角閃石を、2 は長石を、3 は角閃石、長石を含む。

第 11 図 SK070-001 ～ 003 は SK070 出土の弥生土器である。1・2 は下城式甕の口縁部で、1 はやや外側に開く。口縁端部外面に刻目を施し、口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。胎土に角閃石、長石、石英を含む。2 は口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。胎土に長石、石英を含む。3 は甕の底部で、胎土に角閃石、長石を含む。

第 11 図 SK045-001 ～ 004 は SK045 出土の弥生土器である。1 は壺の口縁部で、胎土に角閃石、長石を含む。3 は壺の頸部で、2 条の沈線と 1 条の刺突文をめぐらす。胎土に角閃石、長石、石英を含む。2 は下城式甕の口縁部で、やや外反する。口縁端部に刻目、口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。胎土に長石、石英を含む。3 は台付鉢の脚部で、胎土に角閃石、石英を含む。

第 11 図 SK010-001 ～ 005 は SK010 出土の弥生土器である。1 は壺胴部で、重弧文を施す。胎土に角閃石、長石を含む。2～4 は下城式甕の口縁部で、口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらし、4 はさらに口縁端部に刻目を施す。2 は胎土に角閃石、長石、石英を、3 は角閃石、長石を、4 は角閃石、石英を含む。5 は甕の底部で、長石、石英を含む。

第 11 図 SK060-001 ～ 002 は SK060 出土の弥生土器である。1 は甕の底部で、胎土に角閃石を含む。2 は壺の口縁部と思われ、口縁端部が凹状を呈す。外面にススが付着する。胎土に角閃石、石英を含む。

第 11 図 SK065-001 ～ 002 は SK065 出土の弥生土器である。1 は下城式甕の口縁部で、やや外側に開く。口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらす。胎土に長石、石英を含む。2 は甕の底部で、胎土に角閃石、長石を含む。

第 11 図 SK009-001 は SK009 出土の弥生土器で、高坏もしくは台付鉢の脚部である。外面に赤色塗彩が見られる。胎土に角閃石、長石を含む。

第 12 図 SK040-001 は SK040 出土の弥生土器である。下城式甕の口縁部で、外側に開く。口縁部下に 1 条の刻目突帯をめぐらせる。胎土に角閃石、長石を含む。

第 12 図 SK015-001 ～ 005 は SK015 出土の弥生土器である。1 は壺の口縁部で、口縁端部を上方につまみ上げ、内面は肥厚した上にさらに内面に向かって鋤先状を呈している。胎土に角閃石、長石を含む。2・3 は東北部九州系の甕の口縁部で、どちらも口縁端部を上方につまみ上げるタイプである。4・5 は甕の底部で、4 の内面にはススが付着している。2～5 はともに胎土に角閃石、長石を含む。

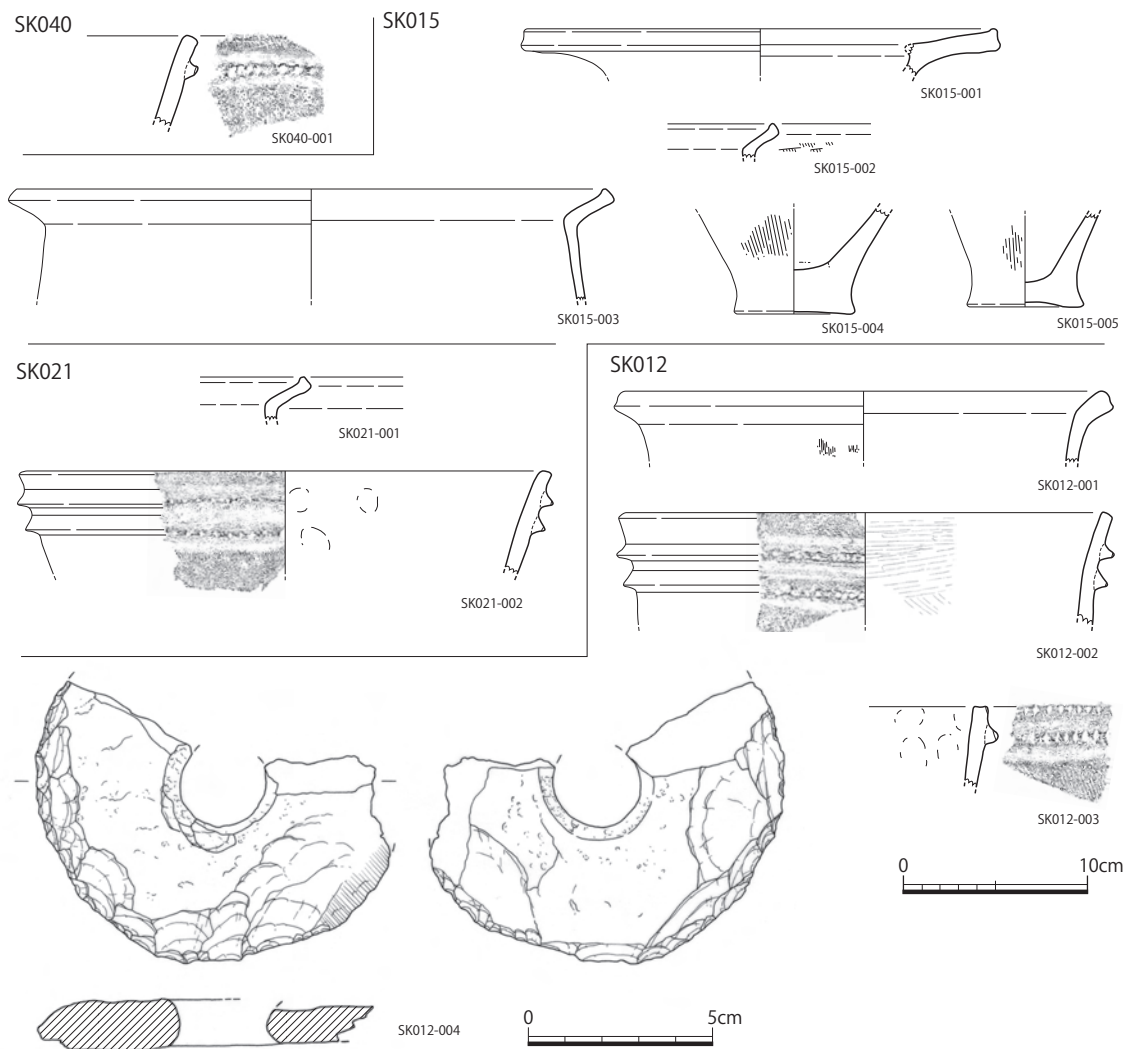
第 12 図 SK021-001 ～ 002 は SK021 出土の弥生土器である。1 は東北部九州系の甕の口縁部で、口縁端部を上方につまみ上げるタイプである。胎土に角閃石を含む。2 は下城式甕の口縁部で、外側に開く。口縁部下に 2 条の刻目突帯をめぐらせる。胎土に長石・石英を含む。

第 12 図 SK012-001 ～ 004 は SK012 出土の遺物で、1～3 は弥生土器、4 は打製石器である。1 は東北部九州系の甕の口縁部で、胎土に角閃石、長石、石英を含む。2・3 は下城式甕の口縁部で、2 は口縁部がわずかに外反し、口縁部下に 2 条の刻目突帯を口縁部下にめぐらせる。3 は口縁部がわずかに開き、1 条の刻目突帯を口縁部下にめぐらせる。4 は打製環状石斧で、緑色片岩製である。

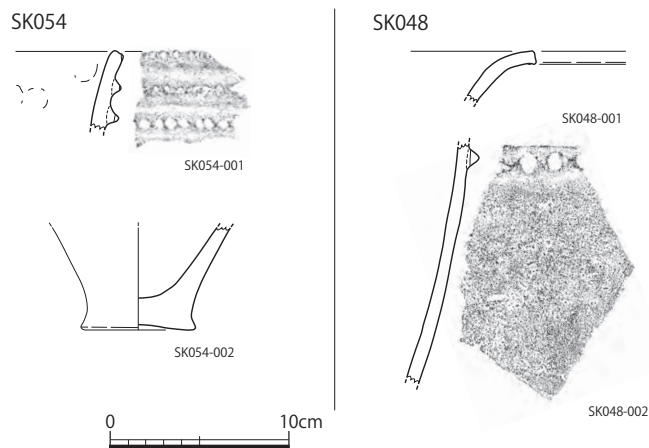
第 13 図 SK054-001・002 は SK054 出土の弥生土器である。1 は下城式甕の口縁部で、口縁端部に刻目を施し、口縁部下に 2 条の刻目突帯をめぐらせる。胎土に角閃石、長石、石英を含む。2 は甕の底部で、胎土に角閃石を

含む。

第 13 図 SK048-001・002 は SK048 出土の弥生土器で、1 は壺の口縁部である。胎土に角閃石、石英を含む。
2 は下城式甕の口縁部で、口縁部下に刻目突帯をめぐらせる。胎土に長石、石英を含む。



第 12 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図② (1/4・1/2)



第 13 図 米竹遺跡第 5 次出土遺物実測図③ (1/4)

第 4 章 まとめ

第 1 節 第 5 次調査の成果

今回の米竹遺跡第 5 次調査では、弥生時代の土坑を多数検出しており、その中には貯蔵穴と考えられる土坑も多数確認している。貯蔵穴と考えられる土坑からは土器以外の炭化米や炭化穀物類などは出土していないが、これまで、米竹遺跡（第 4 地点）や下郡遺跡群などで炭化米などともに確認された貯蔵穴と平面形状が類似していることから、今回の調査では貯蔵穴ではないかと推定した。

下郡遺跡群における平面形状の分類を引用すると円形（楕円形を含む）：A 類、長方形：B 類に分けられ、それらはさらに中央に円形の土坑をもつもの：1 類、もたないもの：2 類に分けられる。今回検出した貯蔵穴は形状不明及び未掘の 4 基を除いて計 12 基である。A－1 類、A－2 類はともに 5 基ずつの計 10 基であり、B 類に関しては、B－1 類は確認されず、B－2 類が 2 基確認されたのみであるなど、平面形状が円形を呈するものが圧倒的に占める。またこれら貯蔵穴の断面形状は、多くが袋状やフラスコ状、方形などの形状である。先の下郡遺跡群では例の少ない断面形状であるが、これまでの周辺調査において検出した同時期の貯蔵穴と考えられる土坑や、第 4 地点で検出した炭化米出土の貯蔵穴では、同様の断面形状であり、東田室遺跡など大分平野の他遺跡でも見られる形状であるため、米竹遺跡含め、大分平野における一般的な断面形状であったと考えられる。

遺構の配置状況では、前章冒頭でも述べているとおり、北側の密度がかなり高く、南側に行くほど低くなる。これは貯蔵穴と考えられる土坑においても同様で、形状不明及び未掘の 4 基を含めた計 16 基のうち 13 基が北半分に位置している。また SK050・005・040 において、下郡遺跡群で示唆されているようなサークル状の配置を示している可能性を考えたが、深さに大きな差異がある点、平面形状及び断面形状に統一感が見られない点からサークル状配置ではないと判断される。それ以外についても同様である。

时期的には、大半が弥生時代中期中頃に帰属すると考えられるものである。第 11 図 SK010-001 など中期前半の特徴を示すものも含まれているが、その他の共伴する遺物が中期中頃と考えられるなど、貯蔵穴と考えられる土坑に関しては时期的により限定された範囲で捉えることができる。それは切り合い関係をもつものについても同様であるため、短い期間での造り替えが想定される。

第 2 節 結語

これまでの調査所見により、集落の中心部を北側の台地の先端に近い位置に想定していた。今回の調査では、北側に遺構がより密集する状況が確認できた。これは調査区よりもさらに北側に集落中心部が位置することを示していると考えられ、これまでの調査成果とおおむね整合する。ただ第 3 次調査など他の調査では弥生時代中期前半から中頃の時期のものが主体であるのに対し、今回の調査区では貯蔵穴に関しては中期中頃とより限定された時期におさまる。このことは貯蔵施設域の集落内での変化など、集落構造の変化によるものとも考えられ、集落における時期毎の空間利用の変遷を検討する手がかりになるであろう。また平面形状がほとんど円形を呈し、断面形状が袋状などを呈することや、他遺跡で見られた特異な配置がここでは見られないことなどは、米竹遺跡における貯蔵穴の特徴と捉えることも可能であろう。

今後周辺において調査が行われる際には、（１）集落範囲及びその中心部の特定、（２）集落構造及びその変遷の把握、（３）貯蔵施設域の移動の可能性の検証といったことに注意を向ける必要があると考える。特に第 4 次調査において確認された貯蔵穴群はその時期と配置の状況から、別の集落中心部に帰属する可能性を示し、集落の移動の可能性についても想定されており、集落構造の変化とそれに伴う貯蔵施設域の移動についてはより細かく見ていく必要がある。

まだまだ情報が断片的なため、不明な部分は多いが、今後の調査によって、米竹遺跡の集落の構造及び展開について全容を解明できれば、台地上における集落構造の特性や、ひいては他遺跡との比較による大分平野の弥生集落の特性などといったことについての解明へもつながっていくであろう。

第1表 米竹遺跡第5次調査区出土遺物観察表

通 番 号	挿図番号	出土 遺構	種別	器種	法 量					色 調		調整・紋様		胎土	備考
					口径 (最大長)	器高 (最大幅)	底径 (最大厚)	孔径	重量	外面	内面	外面	内面		
001	第11図 SK005-001	SK005	弥生土器	壺	(16.6)	2.6+ α	—	—	—	褐灰	褐灰	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	角閃石・長石	
003	第11図 SK005-002	SK005	弥生土器	甕	—	4.7+ α	—	—	—	灰黄	橙	ナデ・刻み目 ・刻み目突帯	ナデ	長石・白色粒子・ 石英	
002	第11図 SK005-003	SK005	弥生土器	甕	(20.8)	4.1+ α	—	—	—	明黄褐	明黄褐	刻み目・刻み目 突帯・不明	ナデ	角閃石・長石・ 白色粒子・赤色粒子	
004	第11図 SK005-004	SK005	弥生土器	甕	—	6.0+ α	(6.8)	—	—	黄橙	不明	不明	不明	長石	
039	第11図 SK070-001	SK070	弥生土器	甕	—	4.3+ α	—	—	—	にふい黄橙	にふい黄橙	ヨコナデ・ハケ目 ・刻み目・刻み目突帯	ナデ	角閃石・長石・ 白色粒子・石英	
038	第11図 SK070-002	SK070	弥生土器	甕	(21.4)	4.4+ α	—	—	—	橙	橙	刻み目突帯・不明	不明	長石・白色粒子 ・礫・石英	
040	第11図 SK070-003	SK070	弥生土器	甕	—	6.5+ α	5.9	—	—	黄橙	黒褐	ハケ目・ヨコナデ・ ナデ	ナデ・指オサエ	角閃石・長石	
030	第11図 SK050-001	SK050	弥生土器	甕	—	2.3+ α	—	—	—	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	角閃石・赤色粒子	
031	第11図 SK050-002	SK050	弥生土器	甕	—	3.0+ α	—	—	—	浅黄橙	浅黄橙	不明	不明	長石	
029	第11図 SK050-003	SK050	弥生土器	甕	(23.4)	2.8+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ	ヨコナデ・不明	長石・角閃石	
023	第11図 SK045-001	SK045	弥生土器	壺	(15.0)	3.6+ α	—	—	—	赤	赤	不明	指オサエ・不明	角閃石・長石 ・白色粒子	
025	第11図 SK045-002	SK045	弥生土器	甕	—	6.0+ α	—	—	—	にふい黄橙	黄灰	ヨコナデ・ハケ目 ・刻み目・刻み目突帯	不明	石英・長石 ・白色粒子	
024	第11図 SK045-003	SK045	弥生土器	甕	—	3.6+ α	—	—	—	にふい黄橙	にふい黄橙	ナデ・ハケ目・沈線 ・刺突文	ナデ・指オサエ	長石・石英・角閃石	
026	第11図 SK045-004	SK045	弥生土器	台付鉢	—	6.4+ α	(9.6)	—	—	橙	橙	不明	不明	角閃石・石英・ 赤色粒子・白色粒子	
010	第11図 SK010-001	SK010	弥生土器	壺	—	13.6+ α	—	—	—	灰	にふい黄橙	ハケ目・重弧文 ・不明	ナデ・指オサエ	長石・角閃石 ・白色粒子・礫	
006	第11図 SK010-002	SK010	弥生土器	甕	—	4.9+ α	—	—	—	淡黄	淡黄	ヨコナデ・指オサエ ・刻み目突帯・不明	ナデ	角閃石・長石・石英	
008	第11図 SK010-003	SK010	弥生土器	甕	—	5.6+ α	—	—	—	浅黄橙	黒褐	ヨコナデ・指オサエ ・刻み目突帯・不明	不明	角閃石・長石	
007	第11図 SK010-004	SK010	弥生土器	甕	(22.0)	6.8+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ・刻み目 ・刻み目突帯・不明	ナデ	長石・白色粒子 ・石英	
009	第11図 SK010-005	SK010	弥生土器	甕	—	4.7+ α	(6.6)	—	—	にふい黄	にふい黄褐	ナデ	ナデ	長石・石英・白色粒子 ・赤色粒子・礫	
034	第11図 SK060-001	SK060	弥生土器	甕	—	5.5+ α	(5.8)	—	—	橙	にふい黄橙	不明	ナデ	角閃石・白色粒子	
035	第11図 SK060-002	SK060	弥生土器	壺	—	2.5+ α	—	—	—	にふい黄橙	にふい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	角閃石・白色粒子・ 石英	外面に スス付着
036	第11図 SK065-001	SK065	弥生土器	甕	(30.2)	2.5+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ ・刻み目突帯	不明	長石・白色粒子 ・礫・石英	
037	第11図 SK065-002	SK065	弥生土器	甕	—	6.3+ α	(6.6)	—	—	にふい黄橙	灰黄褐	ハケ目・ヨコナデ・ ナデ	ナデ	長石・角閃石	
005	第11図 SK009-001	SK009	弥生土器	高坏	—	5.7+ α	—	—	—	橙	浅黄橙	不明	シボリ痕	長石・角閃石 ・赤色粒子・白色粒子	外面に 赤彩あり
022	第12図 SK040-001	SK040	弥生土器	甕	—	4.9+ α	—	—	—	灰黄褐	浅黄橙	ヨコナデ・刻み目 突帯・不明	ナデ	角閃石・長石 ・白色粒子	
015	第12図 SK015-001	SK015	弥生土器	壺	(25.4)	2.5+ α	—	—	—	灰黄褐	にふい黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	長石・角閃石 ・白色粒子・赤色粒子	
017	第12図 SK015-002	SK015	弥生土器	甕	—	1.8+ α	—	—	—	褐	褐	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ	長石・角閃石	
016	第12図 SK015-003	SK015	弥生土器	甕	(31.8)	6.0+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ・不明	ヨコナデ・ナデ	角閃石・長石	
018	第12図 SK015-004	SK015	弥生土器	甕	—	5.7+ α	6.2	—	—	明黄褐	明黄褐	ハケ目・ナデ	ナデ	角閃石・長石・赤色 粒子・白色粒子	内面スス付着
019	第12図 SK015-005	SK015	弥生土器	甕	—	5.0+ α	6.0	—	—	橙	にふい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ	角閃石・長石 ・白色粒子・石英	
020	第12図 SK021-001	SK021	弥生土器	甕	—	2.3+ α	—	—	—	にふい黄橙	にふい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	角閃石	
021	第12図 SK021-002	SK021	弥生土器	甕	(27.8)	5.6+ α	—	—	—	にふい黄橙	にふい黄橙	刻み目突帯・不明	ナデ・指オサエ	長石・白色粒子 ・石英	
011	第12図 SK012-001	SK012	弥生土器	甕	(25.8)	3.8+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	角閃石・長石・石英	
012	第12図 SK012-002	SK012	弥生土器	甕	(25.8)	6.1+ α	—	—	—	橙	橙	ヨコナデ・ハケ目 ・刻み目突帯	ハケ目・ミガキ	角閃石・長石 ・白色粒子・赤色粒子	外面に 黒斑あり
013	第12図 SK012-003	SK012	弥生土器	甕	—	4.4+ α	—	—	—	橙	明赤褐	ヨコナデ・ハケ目 ・刻み目・刻み目突帯	ナデ・指オサエ	長石・石英	
014	第12図 SK012-004	SK012	石製品	不明石製品 (環状石斧?)	(7.6)	(9.7)	1.4	2.4	110.5						
032	第13図 SK054-001	SK054	弥生土器	甕	—	4.4+ α	—	—	—	明黄褐	明黄褐	刻み目・刻み目突帯 ・不明	ナデ・指オサエ	長石・角閃石・石英	
033	第13図 SK054-002	SK054	弥生土器	甕	—	5.7+ α	5.8	—	—	黄橙	灰黄褐	不明	ナデ	角閃石・白色粒子 ・赤色粒子	
027	第13図 SK048-001	SK048	弥生土器	壺	—	2.9+ α	—	—	—	黄橙	黄橙	不明	不明	角閃石・白色粒子 ・礫・石英	
028	第13図 SK048-002	SK048	弥生土器	甕	—	13.4+ α	—	—	—	明赤褐	明赤褐	刻み目突帯・不明	不明	長石・白色粒子 ・赤色粒子・石英	

第5章 立会調査

今回の宅地開発事業においては既存の擁壁が存在し、それを撤去した後に新たな擁壁の築造が予定されていた。大分市教育委員会では、事業者と協議を行った上で、新たな擁壁の築造時に立会調査を実施することとし、平成22年9月17日～18日に実施した。

事前の協議時に、既存擁壁により既に遺構が破壊されている可能性が高いと判断して立会調査を選択したのであり、北側の既存擁壁部分には遺構が残っていないことが確認されたが、東側の既存擁壁は予想外に基礎構造物が浅く、その下には弥生時代の遺構が多く残存していることが判明した。このため、東側擁壁の立会調査においては、一部の遺構を完掘することができたのみで、ほとんどの遺構については、遺構配置図作成と、掘削後の断面図作成を実施したにとどまる。

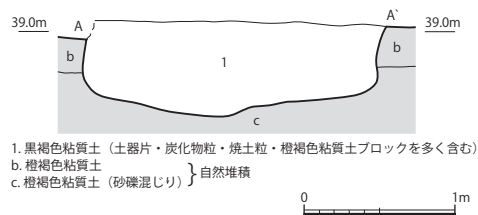
検出された遺構は、弥生時代の貯蔵穴と推定されるものを含む土坑群である。直径1～2mの円形あるいは不整円形を呈し、検出面からの深さは20～60cmである。同規模の遺構が切り合いを有する箇所も4か所で確認できることから、同じ場所で造り換えが行われ、継続的に使用されていることを示している。

調査区北端で最も良好な形で検出できたSK1001は、直径約2.0m、検出面からの最大深は中央部で65cmである。本調査で検出されたような、底面のピットは明確には認められなかった。炭化物粒、焼土および地盤土層である橙褐色粘質土ブロックを多く含む土単一で埋積しており、基盤土層のブロックを多く含む土を埋土することから、意図的な埋戻しを窺うことができる。

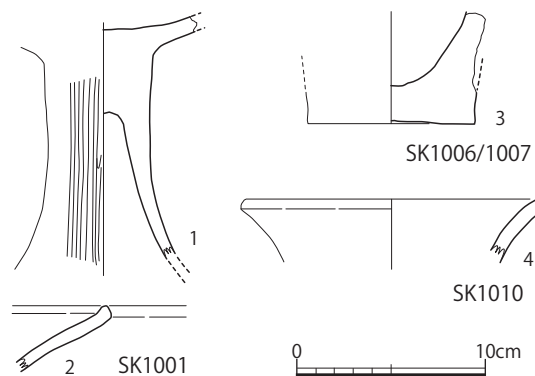
埋土については、基盤土層をブロックとして含む、黒褐色～暗褐色土単層のものが多く認められ、意図的な埋戻しが行われたと推定されるものが多い。検出された遺構のうち遺物が出土したものは少ないが、概ね弥生中期～後期前葉に位置づけられる可能性が高い。後期に位置づけられるものは5次調査区（本調査）ではみられないため、当該期集落の中心エリアが中期とは位置を異にしている可能性がある。

出土遺物（第15図）

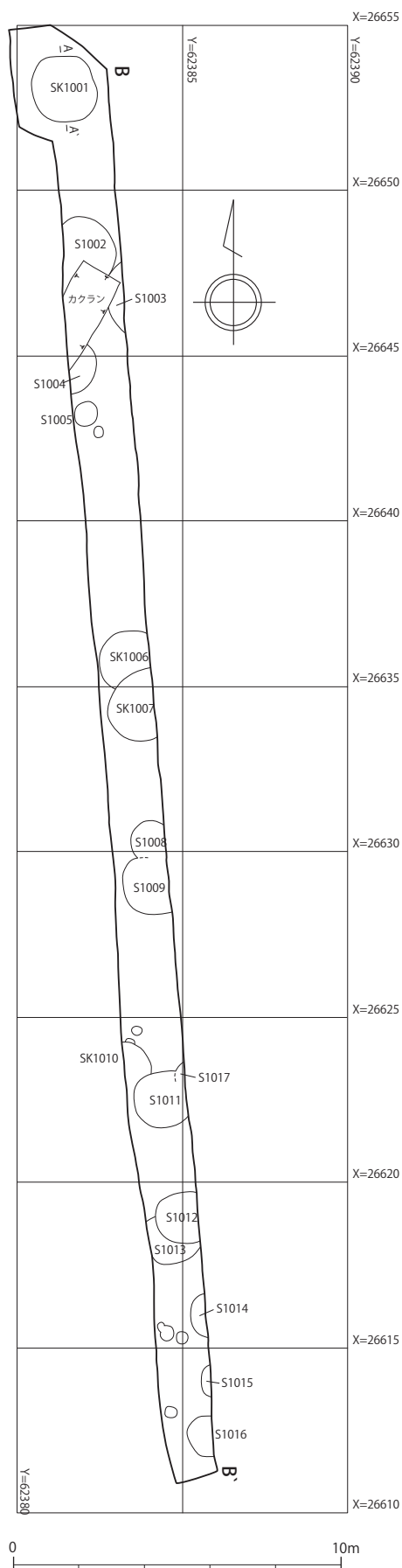
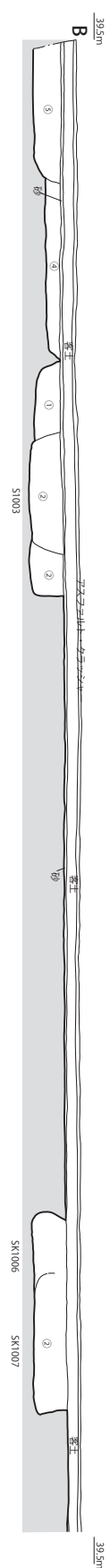
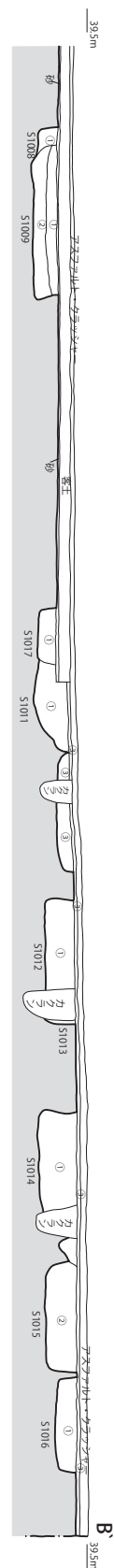
1・2はSK1001から出土したもので、1は高坏脚部で外面には縦方向のミガキが認められる。2は1と同一個体の可能性がある高坏口縁部である。弥生時代後期前葉に位置づけられる。3はSK1006/1007出土の甕底部で、外面にはハケ目が認められる。弥生中期に位置づけられる。4はSK1010から出土したもので、壺の口縁部と推定される。弥生後期前葉に位置づけられる。



第14図 立会状況写真及びSK1001土層断面写真・図面（1/50）



第15図 立会調査出土遺物実測図（1/4）



第 16 図 立会時平面図及び東壁土層図 (1/100)



調査区全景（北より）



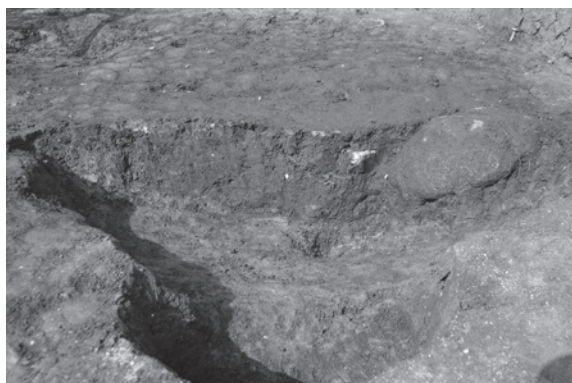
SK005 完掘状況（南より）



SK050 完掘状況（西より）



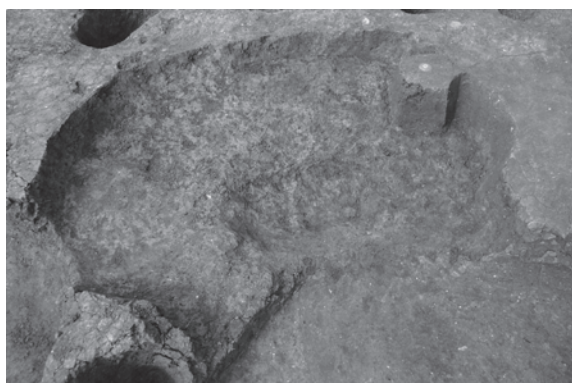
SK020 半裁土層断面（東より）



SK070 土層断面（南より）



SK045 完掘状況（北より）



SK060 完掘状況（南より）

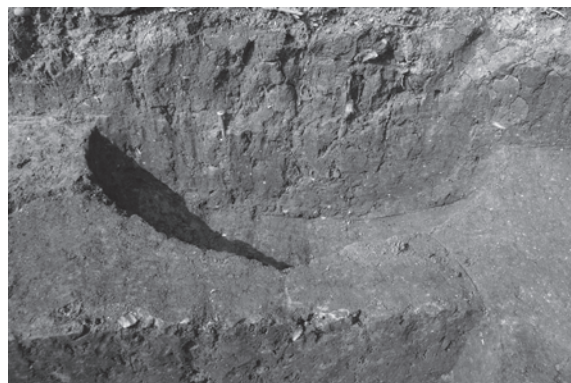


SK065 完掘状況（南より）

写真図版 2



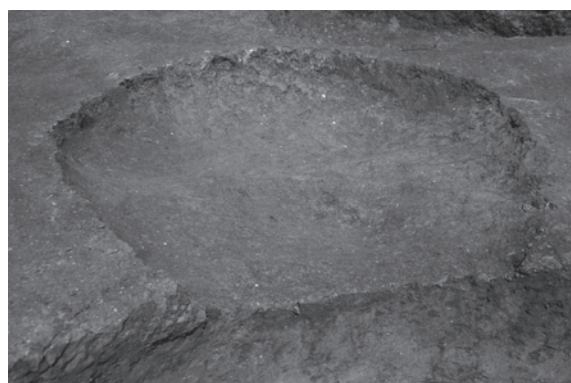
SK028 完掘状況 (東より)



SK011 完掘状況 (西より)



SK055 完掘状況 (西から)



SK040 完掘状況 (南より)



SK019 完掘状況 (西より)



SK015 完掘状況 (南より)



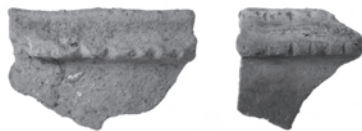
SK012 完掘状況 (東より)



SK021 完掘状況 (西より)



第 11 図 SK005-003・002



第 11 図 SK070-002・001



第 11 図 SK070-003



第 11 図 SK045-001・003



第 11 図 SK045-002



第 11 図 SK045-004



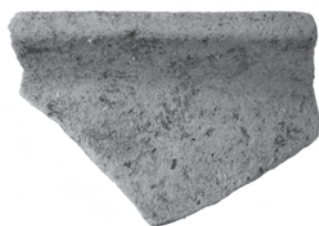
第 11 図 SK010-001



第 11 図 SK010-002・003・004



第 11 図 SK065-001



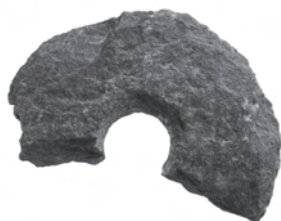
第 12 図 SK015-003



第 12 図 SK015-004・005



第 12 図 SK012-002



第 12 図 SK012-004



第 13 図 SK054-001



第 13 図 SK054-002

報告書抄録

ふりがな	よねたけいせき だい5じちょうさ
書名	米竹遺跡 第5次調査
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第110集
著者	松浦憲治・高畠豊
編集者	佐藤良子
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL 097(534)6111
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号				(㎡)	
よねたけいせき 米竹遺跡	おおいたし おおあざせんざい 大分市大字千歳		44201	148	33° 14' 19"	131° 40' 9"	2010.9.27 ～ 2010.10.8	100.4	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構				主な遺物		特記事項
米竹遺跡 第5次調査	集落	弥生時代	貯蔵穴・土坑				弥生土器・石製品 など		

概要
本書は米竹遺跡第5次調査の発掘調査成果を所収したものである。調査面積は100.4㎡である。調査では調査区全域において、弥生時代中期の貯蔵穴を密度の高い状態で確認している。主な出土遺物は下城式土器や東北部九州系のものを中心とした弥生土器の甕・壺・台付鉢や、緑色片岩製の環状石斧である。

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第110集

米竹遺跡

第5次調査

— 宅地造成に伴う発掘調査報告書 —

2011

平成23年3月31日

発行

大分市教育委員会
大分市荷揚町2番13号

米竹遺跡

第5次調査 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書